

Tom Gill

*Men of Uncertainty:
The Social Organization
of Day Laborers in
Contemporary Japan*

紹介者：中山 いづみ

本書は1996年London School Of Economicsに提出した社会人類学の博士論文を再編集したもので、バブル経済崩壊後の寄せ場を社会人類学的手法で扱った数少ない貴重な資料である。また、英語文献として海外の日本研究や日雇の比較研究にも貢献すると思われる。著者は横浜の寿地区を中心に、1993年から1995年の2年間、「日雇労働者」を観察し、自ら労働者と共に日常生活を体験した。数百人の「日雇労働者」からの聞き取り調査結果をまとめた60万語以上の「フィールドノート」に基づき、本書は社会人類学的立場から現在の「日本における日雇労働者市場」、および「日雇労働者」の歴史・社会的発展をまとめている。そして、彼らの生き様、社会における位置付けの把握を試みている。

構成と内容

- 1章 はじめに
- 2章 歴史的背景
- 3章 寿地区のエスノグラフィー
- 4章 他ドヤ街、寄せ場のエスノグラフィー
- 5章 彼らは何者だ？日雇労働者の素性
- 6章 「Home」の意味
- 7章 寄せ場におけるマージナルアイデンティティ
- 8章 現代日本社会における寄せ場の役割
- 9章 結び

第1章では、著者がなぜ「日雇労働者」、そして「寄せ場」を社会人類学博士論文の主題として選んだかが説明されている。日本に新聞記者として数年間滞在し、日本の習慣に慣れたと思った矢先、取材のため山谷地区を訪れた途端、「日本という国」がわからなくなったそうである。それ以来、「日雇労働」というphenomenon（現象）をより深く理解すべく、研究を続けている（p.2）。

フィールドワークは、1993年の5月から1995年の3月までの約2年間、横浜の寿地区を中心に行なわれた。著者は寿地区に週数回足を運び、また、山谷、釜ヶ崎、笹島、築港、戸畑などの「寄せ場」も短期間訪問した。寿地区のドヤ街には6回程寝泊りし、日雇労働を体験すべく朝早く寿地区に行ったこともある。しかし、見るからに外国人の彼には仕事を心得て体験する事が出来なかった。「調査する人」と「される人」がごく自然に本音で会話をできるように、聞き取り調査には録音機など一切使わず、カメラは一度だけ持参しただけである。これらの情報に基づき、著者が出会った「日雇労働者」を多面的に描写している。

第2章では、中世から1990年代までの「日雇労働」の歴史的形成、そして「日雇労働者」という職種の歴史的解釈を二次資料に基づいて行う。著者によると、「日本の歴史上、労働者を取り締まる例は多数あるが、それらは監禁や奴隷制度に限りなく近いものばかりである」（p.13）。「日雇労働者」とは、この「奴隷と農奴制度」の「文化」から現れ、政治的、経済的支配者と対抗する勢力となり、現在もその対立は続いている（p.13）。中世・近世史を扱った節の見出しは「無宿と非人」、「日雇：部落民::非人：エタ？」、「前工業社会プロレタリアート」、「札、福祉、管理」、「1790年の人足寄せ場」とテーマ別になっている。また、20世紀末まで

の近現代史は「産業革命」、「戦中期」、「戦後寄せ場」、「現代建築産業」というテーマ別になっている。

第3章は、著者が2年がかりの「フィールドワーク」を行った横浜の寿地区のエスノグラフィである。日本語文献では「寿町」と書かれているが、対象地域は横浜市中区の寿町をはみ出て、別の二つの町にもまたがっているので、著者は「町」とは言わず、「地区(district)」とした(p.39)。「場所」と「風景」、人口・歴史、公式と非公式な雇用紹介機関、収入、雇用先産業、労働条件(契約期間)、住居・宿泊(ドヤ街)、レクリエーション、官僚・管理制度、保健衛生、組合活動など、寿地区の多様な側面を表現豊かに描いている。寿地区内の労働者の服装から歩き方、公共施設や宗教関連施設の配置、労働省運営の「職安」と県・市の外郭団体施設の関係、寿地区総合労働福祉会館での仕事の探し方など、詳細にわたり具体的に説明されている。

第4章は日本国内の「寄せ場」紹介と、その比較を試みている。著者は東京の山谷、大阪の釜ヶ崎、名古屋の笹島、福岡の築港と北九州の「寄せ場」にそれぞれ数日滞在し、可能な限り「場所」と「風景」を紹介している。山谷と釜ヶ崎の紹介は、参考文献が多いためか、労働組合運動やドヤ街の相場、ヤクザとの関係、行政などについて詳しくまとめている。さらに、著者は九州の「労働下宿」の存在に着目した。福岡市、北九州市においては「寄せ場」ではなく、下宿先と手配師がドッキングされた「労働下宿」が主流となっていた。80年代後半、人材派遣業法が制定されると、「労働下宿」の大家はある種の「人材派遣業者」と化した。著者は福岡に行くまで、「労働下宿」という言葉を聞いたことさえなかった。なぜ「労働下宿」は北九州に多いのかとの疑問に、著者は石炭や鉄鋼産業の

「納屋」、いわゆる明治以後に行われた労務管理制度の伝統があるためと推測している。すなわち、東日本では「寄せ場」、西日本では「労働下宿」への傾向が歴史的に形成されたのである。

第5章の表題は“Who are these men?”で、社会からはみ出した彼らはどこから「はみ出された」のか、なぜ日雇労働者になってしまったのか、という問題を探る。著者は、彼らの出身地、生い立ち、職業経歴、年齢、結婚歴などに加え、「出生順」を調べた。著者は、日本の伝統では長男が家を相続し他の息子らは家を出て就職しなくてはならないため、労働者の大半は次男か三男だと考えていた。しかし、聞き取り調査した105人のデータによると、長男と末っ子が過半数を占め、著者は労働者の「甘え」の心理と、出稼のあり方の歴史的変容(戦後は長男も家を出た)からその理由を推測する。そして、出生順が「身をたてる道」に影響するという仮説を提示する。

第6章は、日本における「ホームレス」の意味を欧米の定義と比較しながら考察する。一般的に「ホームレス」は二通りに定義される。第一に「ホーム(家)レス(無し)」=「野宿するもの」、第二に「ホーム(家、社会との共同体生活)レス(無し)」=「社会的に足場のないもの、根無し」である。もし後者の定義をとれば、日雇労働者の多くは「ホームレス」の枠に入れられるだろう。しかし、労働者はドヤ街やダンボール箱に住んでいても、「寄せ場」の夏祭りや「焚き火」の場を通して形成された共同体の構成員である。寿地区の夏祭りは、ボランティアの資金集めや付近の飲食店などの寄付に支えられているが、これは共同体の「儀式」と捉えることができる。さらに、著者は冬季にみられる寿地区センター前の「焚き火」を「いろり」と見なし、「Home」に似たコミュニテ

イーがあると指摘する。年末の「越冬」闘争期にプレハブ施設が建てられるが、利用しない人が少なくない。著者は一時的な施設に入るより、築き上げたコミュニティを重視する者がいるからだと考える。

本書において、マージナリティーは「社会制度からの孤立、脱離」と定義されている（p.147）。著者はマージナリティーには「社会的」及び「地理的」現れ方があると考え、7章では社会的マージナリティー、8章では地理的マージナリティーを扱う。

社会的マージナリティーとは、日雇い労働者が現代資本主義社会の中心的組織である「家族」と「会社」から（本意が不本意に）孤立することである。距離的に「家族」から離れている労働者の大半は、社会的にも「離れている」といえる。両親や兄弟から「日雇労働者」としての身分とその生活を拒絶された者や、されると想定する人は多かった。しかし、沖縄出身の労働者のなかには、「日雇労働者」は「出稼ぎ」と変わらない「働き方」と考える労働者もいた（pp.150-51）。

日本人男性にとって、会社関係の重要度はよく社会学・人類学において指摘されているが、「会社」という組織から外れている「日雇労働者」は組織の階層制からも除外されている。一方、「寄せ場」では、労働者間にはある程度の平等があるとする。そして、このマージナルな世界に住む人々は、主流に対抗する「オルタナティブ・アイデンティティ（alternative identity）」を持ち、「寄せ場文化」という独自の価値観を形成している。この寄せ場文化は、日本国内の寄せ場でも共有され、大阪の「日雇労働者」が東京の山谷に来て、「日雇労働生活感がある者」は違和感なく暖かく受け入れられる（p.153）。日雇労働者がマージナルであることで、彼らは社会生活において移動や人間関

係の「自由」を獲得することができる。しかし、その「自由」は健康体で収入がある期間に限られるため、長期的には高齢や病気でその自由が失われ、「運命」に流される可能性が大きい（p.147）。

第8章は「地理的マージナリティー」を考察する。寿地区やそれ以外の「寄せ場」地区付近では、歴史的に売春街、死刑場、ヤクザや外国人居住地区、そして、最近では障害者の施設が存在する。すなわち、地方自治体の政策によってマージナルな人々は同じ地域に「隔離」されているのである。著者は、日本社会で「出るくぎは打たれ」ない場合もあると考える（p.171）。すなわち、社会からはみ出たとされる人々は、「寄せ場」など隔離された特別な地域のなかで社会的なルールに沿って生きていけば、社会では許容されないことでも許されるのである。またこの章は、日本の「寄せ場」とそれに対応する米国の「skid row」を比較し、「skid row」はかなり消滅したものの「寄せ場」は時代を超え存続していることを指摘する（pp.180-182）。その理由として、著者は歴史的、マクロ経済的、そして文化的要因をあげている。

結びでは、今後の「日雇労働者市場（人材市場）」、そして「日雇労働者」と「寄せ場」の将来を予測している。日雇労働市場は、急激な産業構造の変化に対応して変化し始めた。著者は、日雇労働市場が従来の重工業主導からサービス産業主導へと移り、労働力の中心も中高年層から若者層へ、また男性から女性へと変化していると指摘する。そして、この労働市場で働く人々の呼び方、「日雇」から雇う者にも雇われる者にも（なぜか）響きの良い「フリーター」に変化している。手配師は人材派遣会社に変化し、「日雇労働者」たちが集まる場所は人材派遣会社の登録場となる。その結果、労働者一人一人が単独に仕事を求め、日雇労働においての

共同体、「寄せ場」コミュニティー、それらに基づいた「オルターナティブ・アイデンティティ」と「寄せ場文化」が形骸化する可能性を示唆する。

以上が本書の紹介であるが、最後に英語文献で日雇労働者と寄せ場を対象にした本がもう一冊あることを述べたい。1996年に出版されたEdward Fowlerの*San'ya Blues: Laboring Life in Contemporary Japan* (邦訳は『山谷ブルー：寄せ場の文化人類学』、川島めぐみ訳、

洋泉社、1998年10月)である。山谷を舞台としたこの作品と読み比べると有意義であろう。

(Tom Gill, *Men of Uncertainty: The Social Organization of Day Laborers in Contemporary Japan*, SUNY Series in Japan in Transition, State University of New York Press, 2001年1月刊, xvii+ 263頁, 定価USD\$68.50)

(なかやま・いづみ ハーバード大学大学院
博士後期課程、法政大学大原社会問題研究所
客員研究員)

●アジアの「町内会」を再発見する//
アジアの地域住民組織

一町内会・街坊会・RT/RW
吉原直樹著 A5判・328頁 ●5300円

日本の町内会、香港の街坊会、インドネシアのRT/RW、アリサン、PKKに焦点を据え住民組織の構造的特質に迫る。

【本書の内容】

- I 二つの統後のまもり 一町内会への一視座一
- II 日本軍政期の香港行政と街区制
- III 街坊会の沿革と存在形態
- IV 香港の政治制度と街坊会の位置 → 返還前夜のひとこま
- V RT/RWの沿革と存在形態
- 補論 RT/RWとアリサン
- VI PKKとグラスルーツの世界
- VII 地域住民組織における共同性と公共性
- VIII ポスト町内会体制と町内会の「再発見」

●空間論的アプローチを模索しつつ都市環境システムを探索

都市社会計画と都市空間

一盛岡市のまちづくりを中心に
橋本和孝・吉原直樹編著 A5判・232頁 ●3800円

【本書の内容】

- 序章.....橋本和孝
- 盛岡市の都市空間の特徴.....初澤敏生・中西・吉瀬・大久保武
- 盛岡市の都市行政.....橋本和孝・大久保武
- 盛岡市の地域住民団体とまちづくり.....吉瀬雄一・吉原直樹
- 盛岡市の女性団体とまちづくり.....竹村祥子
- 盛岡市の子どもの都市環境システム.....竹村祥子
- 盛岡市の高齢者の都市環境システム.....中西典子
- 一高齢者保健福祉政策と地域・市民活動を中心として一
- 終章 都市社会計画の可能性と課題.....吉原直樹

●情報化時代の日本SNC(シニア・ニュー・コミュニティ)を強化しようか?それはいいか?
地域社会情報のシステム化

先駆的な事例分析から福祉、保健、高齢者医療・サポートシステムなど住民や利用者が主体となった情報化社会を探究。
岡部一明著 二六〇〇円 ●注目の最新刊

●情報化時代の日本SNC(シニア・ニュー・コミュニティ)を強化しようか?それはいいか?

町内会を基盤に生活環境問題に取り組む住民活動を全国的に調査し「コミュニティ」政策下の町内会の新しい可能性を探る。
岩崎信彦・上田惟一・広原盛明・鎌坂学・高木正朗・吉原直樹編 六五〇〇円

●貧困・失業問題を隠蔽する現代社会の構造を問う
日雇労働者・ホームレスと現代日本
社会政策学会誌第10号(社会政策学会年報通巻49集)
パブル崩壊後の不況と失業の深化の中で雇用の非正規・フロリカと連動し顕在化したホームレス問題の現状と動向を把握。
伊地知紀子著 四〇〇〇円

●生活世界から
生活世界の創造と実践
元世紀末以降の済州島村人の生活実践をとおし構造化というマクロな社会変化に対する個人の主体的対応の可能性を考察。
生活誌から 五六〇〇円

御茶の水書房

〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20 TEL.03-5684-0751
/表示価格は税別 http://homepage1.nifty.com/ochanomizu-shobo